巻頭言

研究室の窓からの風景

臨床心理学部　学部長　香　川　　克

私の研究室の窓からは、宇治の山が見える。この山は、京都と近江の境につながっていて、山の向こうには、ここからは見えないけれど琵琶湖の南の平野が広がっているはずである。思えば25年以上にわたりこの景色を見続けていることになるが、山の形は、全く変わらない。

少し手前に目を移すと、キャンパスの建物があり、こちらはこの間にずいぶん変わってきた。グラウンドだったところに短大の研究室と教室が入る大きな棟ができているし、ガラス張りの学生サロンも新設された。眼下に見える低い建物の屋根の色は、何度か大きく変わってきた。防水のためということで一面のオレンジになった時は、こちらの部屋までオレンジ色に染め上げられるようで、ひどく落ち着かなくなった。今は、ほどよいグレーになっているので、安心して過ごしている。

「変わらないもの、変わりゆくもの」というわけだが、面白いのはすぐ隣の高い方の建物の壁である。この建物は大学開設以前からの建物なので、いささか古びていて、塗装が剥げたところや黒い汚れがあり、ところどころにシミのような模様が浮かんでいる。窓からの景色の最も近いところに、日々変わらず、まるでロールシャッハのインクブロットのような様子で、ずっと私に何かを語りかけているような（気がする）模様があるわけだ。あちらの方では、こちらのことなど気にも留めていないのだろうが。

このシミのような模様は、昨日も一昨日も変わらずにあったに違いない。1年前もきっと同じ模様だったように思う。しかし、25年余り前、私がこの部屋に来た時から同じ模様だったかというと、さすがに自信がない。たぶん、その頃は建物自体ももっと新しかったから、きっと、違う形だったと思う。変わらないはずなのに、少しずつその形を変えてきているようだ。

学生に、自我同一性＝アイデンティティに関する講義をする際に、「昨日も一昨日も、明日も明後日も変わらない『私』」という話をすることがあるが、少なからぬ学生が「『私』は少しずつ変わっているのではないか」というコメントを寄せてくる。それを取り上げて次回の授業で学生に紹介すると、今度は別の学生から「いやいや、やはり変わらずに続いている『私』があると思う」というコメントが寄せられる。変わらないのか変わっているのか、どちらもありそうでおもしろいよね、ということで、授業ではまとめたりすることがある。こんな風に、アイデンティティというものは、「変わりゆくもの、変わらないもの、気づかぬうちに少しずつ変わっているもの、それらが混じりあって、それでも一貫してそこにある」というものなのだろう。

私たちの学部のアイデンティティも、変わりゆくもの、変わらないもの、気づかぬうちに少しずつ変わっているもの、それらが混じりあって織りなされる少し不思議な模様なのだと思う。今年も出来上がった紀要の目次に記された論文の題目や執筆者の方々のお名前を眺めながら、そんなことを考えた。開学当初からおられる方々のお名前もあれば、最近着任なさった方々の名前もある。題目も非常に多様で、よい意味でのカオスになっている。この多様性からくる豊穣なアイデンティティを大切にしていくことが、本学の臨床心理学部の持つ重要な役割であろう。

最後になりますが、この紀要の編集を長きにわたって担当してこられた本学研究支援オフィスの鈴木課長が、今年度をもってご定年で退職なさるとのことです。これもまた、一つの「変わりゆくもの」なのでしょう。長年のご貢献に感謝申し上げるとともに、今後のご健康をお祈り申し上げます。